

ふるさと安曇野 きのうきょうあした

No.32 2026.7.18



江戸時代以来、人々の旅の目的は、寺社詣でや湯治、それにかこつけての物見遊山でした。大正時代、工業化が進むと都会に住む労働者が生まれ、その中に経済的、時間に余裕ができ、家族とともに休日を過ごす人々が登場します。当時全国に路線網を広げていた私鉄各社は、これらの人々に目をつけ、鉄道を利用してもらうために、鉄道沿線にある寺社や温泉、風光明媚な観光地を宣伝しました。

1929年（昭和4）に始まる世界大恐慌は、アメリカの絹糸需要を急激に減退させました。そこに大きく依存していた日本の蚕糸業は、大きな打撃を受け、不景気となり、社会不安を起こしました。長野県は、蚕糸業にかわり、自然資源を生かした観光を新たな産業の柱にしようと考えました。

鉄道会社、県、市町村、観光関係者は、観光客を呼び込もうと、大正時代のおわりから昭和10年頃まで、地域の魅力を宣伝する観光パンフレットを数多く製作しました。その特徴は、飛んでいる鳥がみたように、上空から斜めに見下ろした、鳥瞰図^{ちようかんず}が付けられることでした。鳥瞰図は、写真と違い、紹介したい場所を大きく誇張して表現したり、実際には見えない景勝地を描くことが可能で、観光地や温泉、名勝地を、人々にわかりやすく伝えることができました。鳥瞰図の作者は、吉田初三郎や金子常光の巨匠から、サインをいれない無名の作家までいました。

今回は、大正から昭和初期に製作された、安曇野、松本平、長野県内を大胆にデフォルメし、昔懐かしい美しい色調で描いた鳥瞰図をパンフレットから拡大して、展示します。当時の人々が、何を発信し、何を自慢したかったか、描かれた風景から見てみましょう。

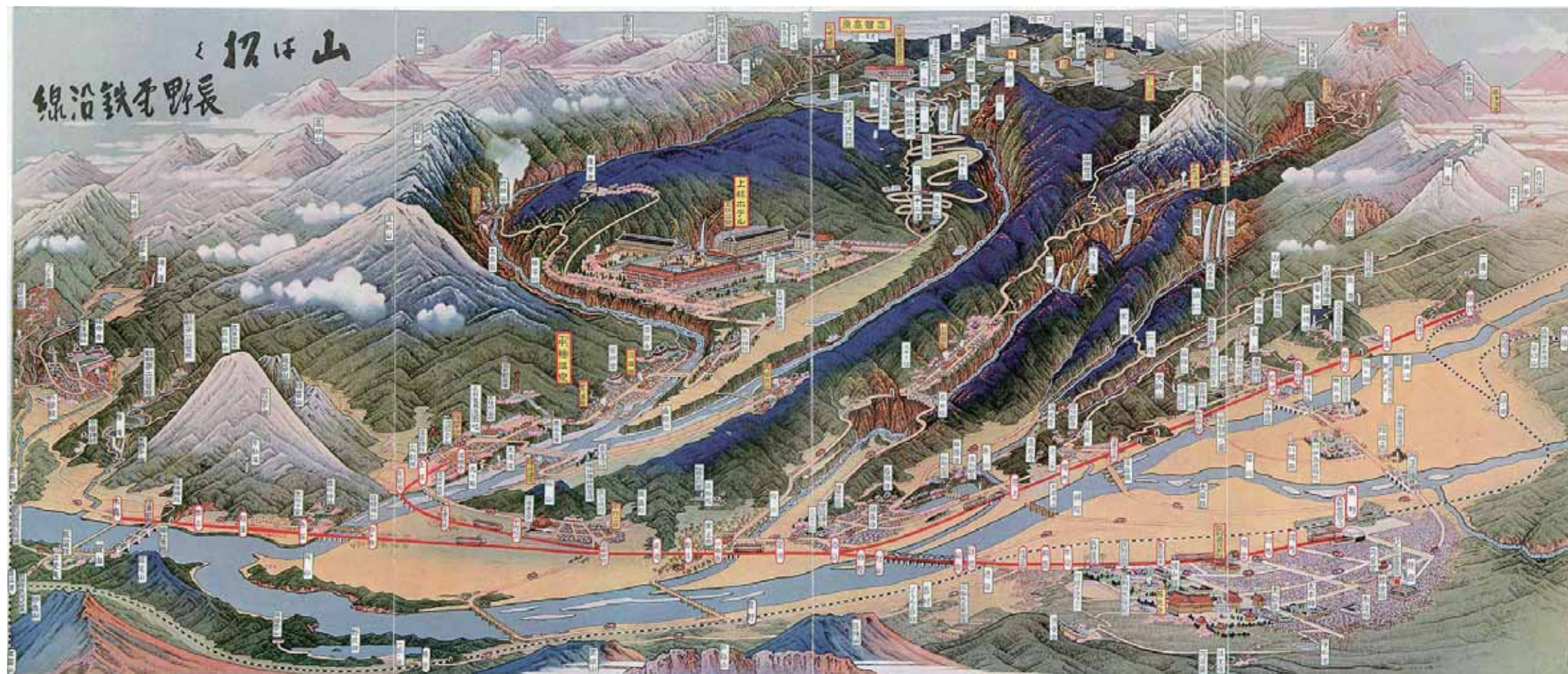
吉田初三郎 VS 金子常光

吉田初三郎（1884－1955）は、多くの情報を盛り込み、大胆なデフォルメをし、色彩豊かに描いた鳥瞰図を、観光パンフレットに使い始めます。クライアントの依頼を受けると、綿密な調査のうえ下絵を描き、それをもとに経営する工房のスタッフが鳥瞰図を完成させました。生涯で1600点以上の作品を完成させたといわれます。「鳥瞰図イコール初三郎」といわれるほど著名な絵師で、長野県内の風景をいくつも描いています。

金子常光は吉田初三郎の工房のスタッフでしたが、1922年（大正11）に袂を分かち独立します。当初は、吉田初三郎と作風が似ていましたが、徐々に変化していきます。吉田初三郎の最大のライバルであり、長野県内の鳥瞰図の数は、初三郎を凌駕しています。生涯で1500点以上の作品を描いていますが、没年はわかりません。



長野電鉄沿線御案内 作者 吉田初三郎 1935年（昭和10）2月 発行 上林ホテル
（原本 リーフレット 大きさ 15.5 cm×53 cm 長野県立歴史館蔵）



長野電鉄沿線御案内 作者 金子常光 1937年（昭和12）2月 発行 長野電鉄株式会社
（原本 リーフレット 大きさ 20.5 cm×45 cm 長野県立歴史館蔵）

二つの長野電鉄株式会社の観光パンフレット「長野電鉄沿線御案内」がありますが、付される鳥瞰図はちがいます。

一つの作者は吉田初三郎、1935年（昭和10）2月の発行です。それまでも同社から依頼を受けて1930年に二つの鳥瞰図を製作しています。

もう一つは、金子常光、1937年2月の発行です。長野電鉄からの依頼は初めてでしょうか。

二つの鳥瞰図の内容は、中心に長野電鉄の経営する上林ホテルを大きく描き、手前に電車の路線を朱線で目立つように入れ、善光寺をはじめとした名所や温泉が描き込まれます。描き込まれている内容はほとんど共通しています。クライアントである長野電鉄の要求に基づいたのでしょう。ただ、吉田初三郎は、自らの作品に必ず入れる富士山、そして下関、青森を入れています。

ある意味、鳥瞰図絵師のトップ二人の競作といえます。

いかがでしょうか。



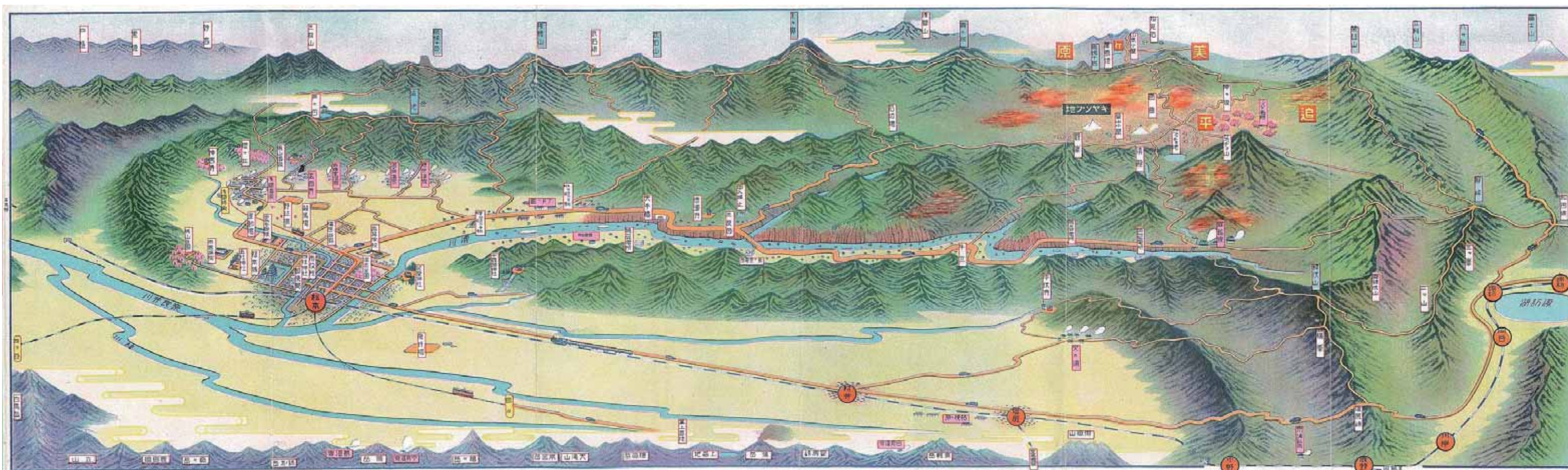
松筑自動車沿線案内 作者・発行年 不明 発行 松筑自動車株式会社
(原本 リーフレット 大きさ 17.5cm×99cm 長野県立歴史館蔵)



現在のアルピコ交通の前身である松筑自動車の発行。自社の松本平全域や諏訪地方を結ぶ多くのバス路線が、自慢するように描かれています。画面中央に、松本から中ノ湯温泉停留所までのバス路線にそって、島々から上高地までを色彩豊かに丁寧に誇張して描いています。安曇野をみると、常念岳の登山口の須砂土停留所まで豊科駅、田沢駅からバスで結んでいます。



1935年（昭和10）頃の製作。松本平の西から東山を描いている珍しい鳥瞰図です。左に浅間温泉郷と美ヶ原温泉郷の温泉地を配し、薄川にそってブドー園、四つの発電所などを描きます。右側にキャンプ地、山小屋のある美ヶ原の春と秋を、桜と紅葉で大きく描いています。背後のはるか遠くには、戸隠、浅間山、八ヶ岳、富士山が見え、手前には北アルプスが描かれます。



美ヶ原連峰案内 作者・発行年 不明 発行 松本観光協会
(原本 リーフレット 大きさ 18cm×78cm 長野県立歴史館蔵)



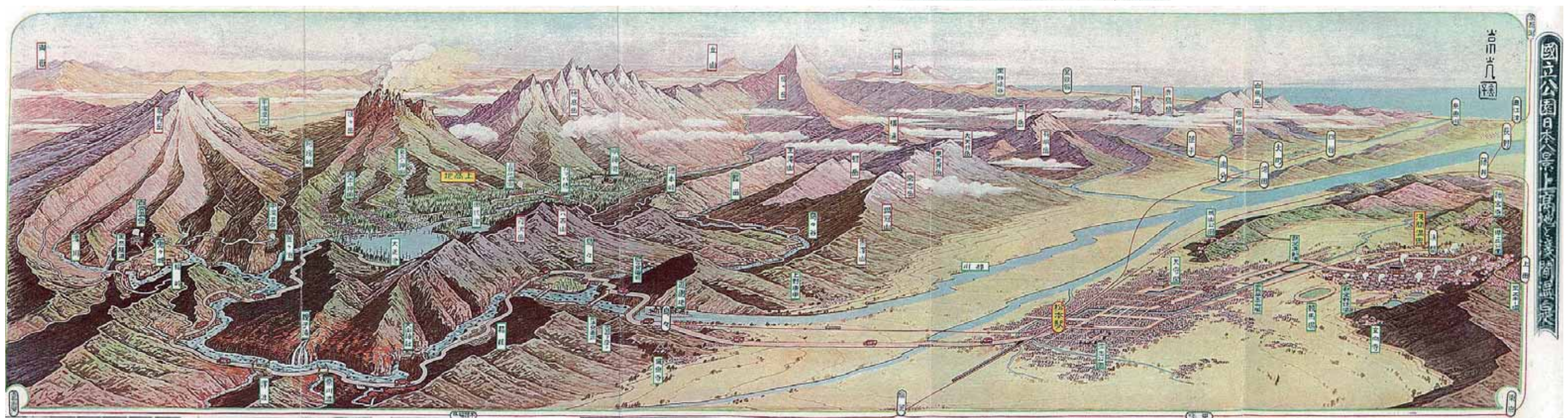
アルプス登山鉄道と筑摩電氣鐵道 作者 金子常光 発行1923年（大正12）7月 発行 筑摩電氣鐵道株式会社
（原本 リーフレット 大きさ 19cm×99cm 長野県立歴史館蔵）



筑摩鐵道は、現在のアルピコ交通の前身。1921年（大正10）に松本駅から新村駅、翌年には島々駅までを開通させます。松本市内は小さく、梓川溪谷を白骨温泉までを描いています。終点島々駅から徳本峠を越える道が大きく、上高地が大きく丁寧に描かれます。噴煙をあげる焼岳、発行される8年前にその泥流が梓川をせき止めできあがった大正池も描かれます。松本駅から浅間駅に向かう浅間線は1924年に開通するため、描かれていません。



同じ金子常光の作。9年前と同じ構図ですが、絵のタッチと色使いはずいぶん違います。松本市街地と同じ大きさで湯気をあげて描かれる名湯浅間温泉に泊まって、日本屈指の観光地、上高地へ誘っているようです。日本八景は、新聞社が主催し一般の投票をもとに当時の名士たちにより1927年（昭和2）に選定された日本を代表する新しい八つの景勝地です。上高地は溪谷部門で選ばれました。

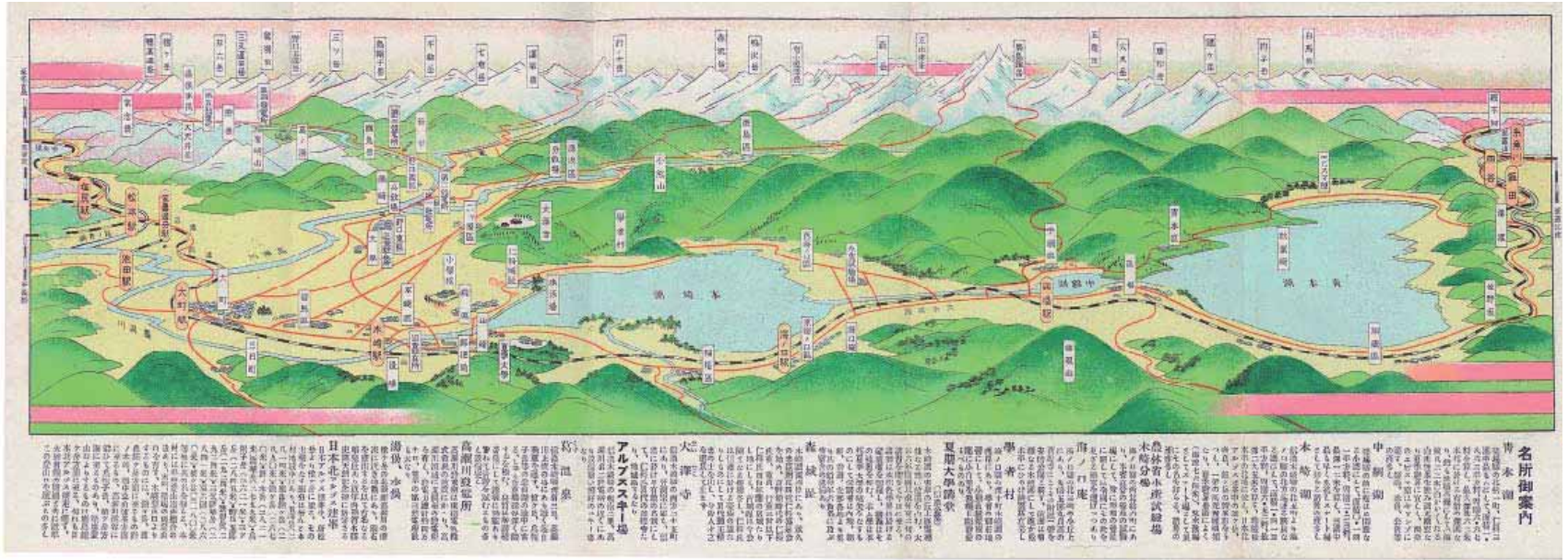


国立公園日本八景上高地と浅間温泉 作者 金子常光 発行1932年（昭和7）7月 発行 浅間温泉商和会
（原本 リーフレット 大きさ 15cm×42.7cm 長野県立歴史館蔵）

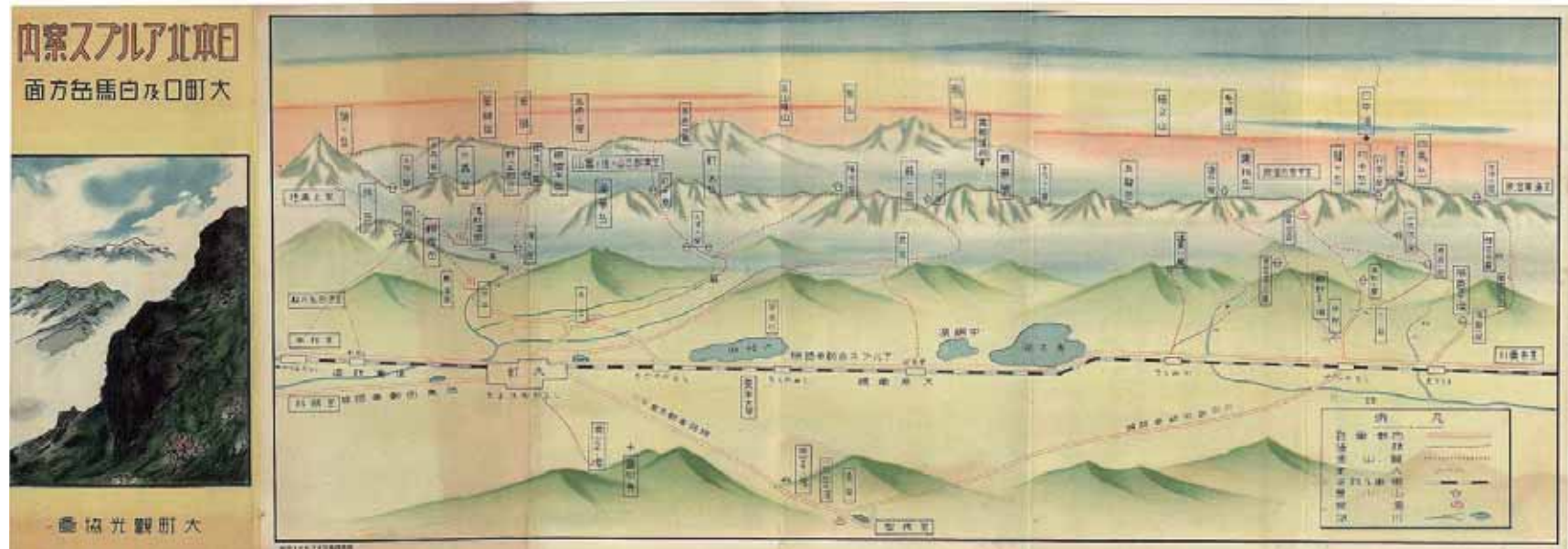


大町附近観光図 作者・発行年 不明 発行 大町観光協会
(原本 リーフレット 大きさ 13cm×37cm 長野県立歴史館蔵)

背後に北アルプスの山々を描きますが、役場や駐在所、郵便局、小学校、分教場を描き、「海ノ口区」のように村内の区が書き込まれています。観光案内というより、村を紹介するパンフレットでしょうか。夏季大学は1917年（大正6）から毎夏、現在まで北安曇教育会が主催する学術セミナーです。描かれる建物は、会場となった信濃公堂でしょう。



平村案内 作者・発行年 不明 発行 平村役場
(原本 リーフレット 大きさ 14cm×38cm 長野県立歴史館蔵)



日本北アルプス案内 大町口 白馬岳方面 作者・発行年 不明 発行 大町観光協会
(原本 リーフレット 大きさ 13cm×37cm 長野県立歴史館蔵)

昭和停留所は1937年（昭和12）に鉄道省に吸収され南大町駅に変わり、大町紡績工場（呉羽紡績）は1936年にできあがるので、その頃の製作でしょうか。葛温泉などの温泉、若一王子神社などの神社仏閣、居谷里池（湿原）などの名所が描かれています。なお、大町市内に中部山岳協会の建物が描かれています。山岳遭難事故の防止と救助の目的で、1936年に軍用鳩の払い下げを受け設立されました。

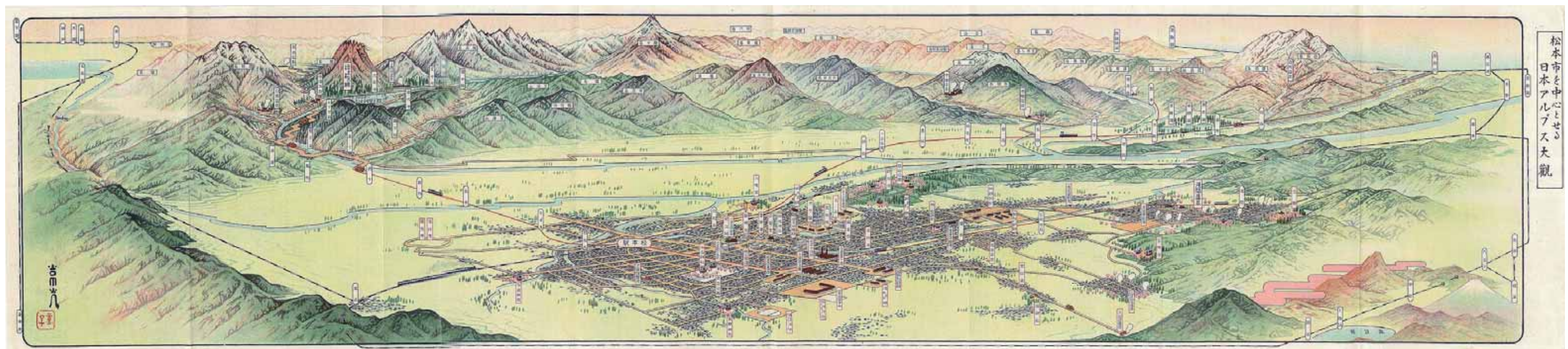
手前に信濃鉄道の大町駅、鉄道省の大糸南線の森上駅まで。神社仏閣などの観光名所は描かれていません。その代わりに、細野スキー場などのスキー場、各駅からの背後の北アルプスの山々への登山路と多くの山小屋が描かれています。まさに山岳観光のパンフレットです。



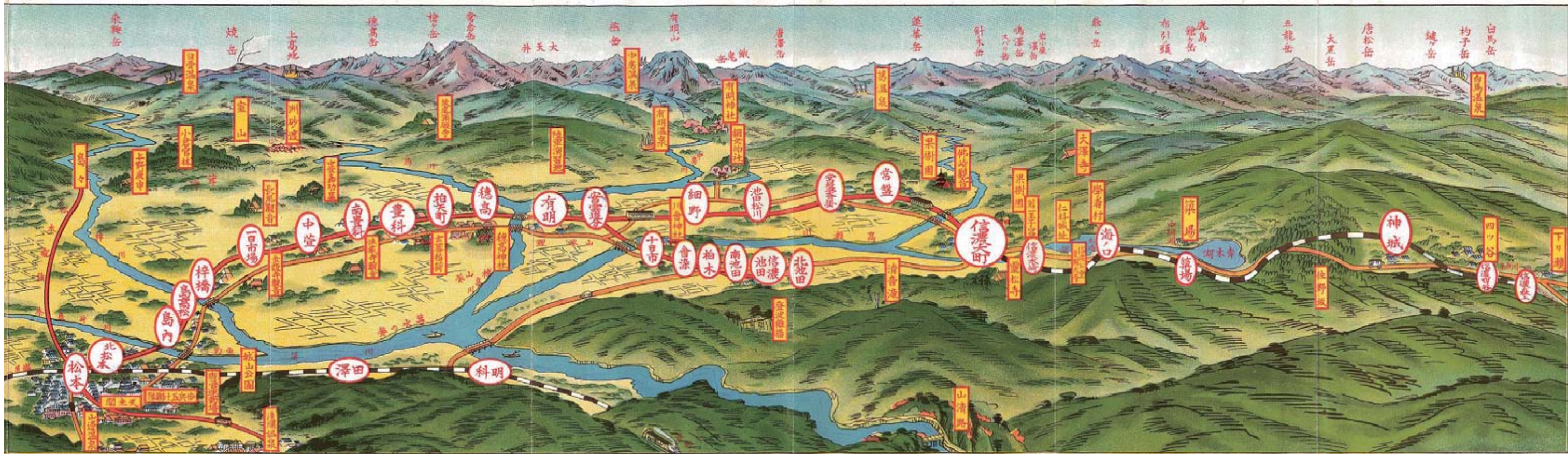
池田鉄道は、1926年（大正15）に開業。路線延長は6.9Km、わずか9駅、所要時間は14分でした。池田町は町とともに北安曇郡の中心地。劇場など町の栄えている様子が描かれています。観光地としては、登離里橋を渡り山を越えて山清路が描かれます。ただ、鉄道は開業以来、乗客が少なく、赤字が続き、信濃鉄道が鉄道省に吸収されると、1938年に廃線になりました。

天下ノ絶景 池田鉄道案内 作者 南果（新美南果） 発行年 不明 発行 池田鉄道株式会社
（原本 リーフレット 大きさ 19cm×54.5cm 長野県立歴史館蔵）

松本市を中心に、その湯気で飾って奥座敷といえる浅間温泉、背後にそれを囲むように北アルプスを大きく描かれています。名所旧跡をあまり描かない代わりに、片倉製糸工場、片倉普及団、農林省蚕業試験場など製糸業で栄えている様子や、日本銀行、旧制松本高等学校などが描かれています。観光パンフレットというより、発展する松本を紹介するパンフレットといえます。



松本市を中心とする日本アルプス大観 作者 金子常光 1930年（昭和5）7月 発行 松本商工会議所
（原本 リーフレット 大きさ 17.5cm×77cm 長野県立歴史館蔵）



信濃鐵道案内 作者 不明 発行年 不明 発行 信濃鐵道株式会社
(原本 リーフレット 大きさ 17.0cm×77.2cm 個人蔵)

信濃鐵道案内は、池田鐵道が開通していることから1926年（大正15）より以降で、鉦女神社の参拝のため設置されたおかめ前駅（現北細野駅）がないことから、1930年（昭和5）以前の刊行と思われます。

中央に安曇野、松本駅から大町駅の区間を駅を丸く囲み大きく描きます。関係のない松本市内は大きく省略して描いています。また、安曇追分駅から北池田駅までの池田鐵道も、関係が密接であったためか、同じ表現で描かれます。鉄道省線（現在のJR）は、大町駅から北が信濃森上までが開通しています。手前には篠ノ井線が、駅数は明科駅と田沢駅のわずか二つです。それに対して信濃鐵道は17駅、乗客に便利のように駅の間隔を狭くして多く設置されています。鉄道省線が国策のため主要都市を早く結ぶことを目的にしたため駅数を少なくしていることがよくわかります。

安曇野市域には、中房温泉と有明温泉の温泉、有明神社や穂高神社、玄蕃稲荷などの神社、栗尾満願寺や法蔵寺観音、金龍寺観音、長尾観音などの仏閣、名所としては中萱嘉助の墓、小倉官林、室山、洲砂渡

が書き込まれる。その他に名産品などとして、萬水の蛸、山葵、鯉、茸狩などが記されます。江戸時代以来の物見遊山の観光地です。また、歩兵第五十連隊（松本）の有明演習場も書き込まれています。安曇野にあることが自慢だったのでしょ

うか。背後には日本アルプスが、有明山を大きく、燕岳、大天井、常念岳を、安曇野からは見えない槍ヶ岳、穂高岳までが描かれます。洲砂渡は大きく描かれます。豊科駅で下車して常念岳や蝶ヶ岳への登山口が洲砂渡であることを強調する、登山観光を意識していることは間違いありません。ただ、上高地は松本平随一の観光地であり、新日本八景に選ばれたにも関わらず取り上げ方は大きくありません。信濃鐵道の営業には関係ないためでしょうか。





中部山岳国立公園と信濃鉄道 作者 不明 発行年 不明 発行 信濃鉄道株式会社
(原本 リーフレット 大きさ 17.5cm×74cm 長野県立歴史館蔵)

昭和駅（現南大町駅）ができあがる1935年（昭和10）、信濃鉄道が鉄道省に吸収される1937年までの間に、北アルプスが中部山岳国立公園に指定（1934年）された記念の観光パンフレットでしょうか。ほぼ中央に、「安曇富士」とも呼ばれる有明山を濃緑で大きく、上高地を含めて北アルプス全体を大きく、登山道も詳しく朱線で描き込んでいます。現在の安曇野市内では「須砂土」から蝶ヶ岳をこえて上高地へ向かう登山口となっています。また、有明駅からは、中房温泉へ、さらに燕岳～大天井～西岳～槍ヶ岳と続く喜作新道、表銀座も描かれます。ある意味、登山者に向けた鳥瞰図です。1934年に施行された国立公園法の帝国議会への提案理由に、「日本の素晴らしい自然や風景を保護し開発して国民の保養に役立たせ

る必要がある。さらに優先的に取り組むべき重要なことは、海外から観光客を誘致し外貨を獲得する必要がある」とあります。日本の自然や景観を売り出して外貨を求めようと国を挙げて観光を振興したのです。この機運を受けて、作成された観光パンフレットです。

観光地は、温泉は中房温泉、社寺は満願寺と穂高神社、有明神社、嘉助神社が、名所としては山葵田が。そして碓山館も描き込まれています。ただ、碓山館は、現在の場所ではなく、柏矢町駅の東側です。碓山の兄たちが、実家に作品を集めて1917年（大正6）から公開していたのです。





観光信州（長野県立歴史館蔵）

鳥瞰図に描かれた安曇野の風景

1934年（昭和9）設立された長野県観光協会が作成したパンフレット『観光信州』の鳥瞰図「長野県の温泉と名勝」には、温泉地や善光寺などの名所が描かれています。安曇野をみると、有明駅、中房温泉と有明温泉、それと燕岳、常念岳が描かれているだけです。広大な水田と桑畑が広がる風景だったのでしょう。それらの産業が順調で、まだ観光に力を入れる必要がなかったのでしょうか。それに対して、現在の松本市は、1933年に松本観光協会を設立し、観光に力を入れはじめます。鳥瞰図に浅間温泉、白骨温泉などの温泉地と上高地を描き、キャッチフレーズは「浅間温泉から上高地」でした。

1916年（大正5）に松本駅から大町駅を開通させた信濃鉄道株式会社は、二枚の鳥瞰図付の観光パンフレットを制作します。1930年頃の「信濃鉄道案内」（7-10p）は、江戸時代の旅行の目的地の温泉地と寺社仏閣が描かれています。5年ほど経って、北アルプスが中部山岳国立公園に指定されると、「中部山岳国立公園と信濃鉄道」（8-9p）を制作しました。北アルプスが大きく描かれ、そして登山道が細かく入っています。信濃鉄道が山岳観光に軸足を移そうとする意気込みが感じられます。

ところが日中戦争が始まった1937年、国策により信濃鉄道は国有化されてしまいます。太平洋戦争が始まると、観光ブームは終わり、鳥瞰図も国防の情報が漏れるということで刊行が禁止となります。

再び、観光が脚光を浴びるのは、昭和30年代以降、平和な時代になってからです。

（原 明芳）

「ふるさと安曇野 きのう きょう あした No.32」

編集 安曇野市豊科郷土博物館

発行日 令和8年7月18日

安曇野市豊科郷土博物館 〒399-8205 長野県安曇野市豊科4289-8

TEL：0263-72-5672 / FAX：0263-72-7772

URL：<https://www.city.azumino.nagano.jp/site/museum/>